競技かるたの世界から鉄研へ

倉本　綾

今年四月に高輪に赴任し、旅行・鉄道研究部の顧問を務めている倉本です。私は高校時代から競技かるたをしており、大学生の頃には各地で開催される大会に出場するために、青春１８きっぷで東北・四国・関西など様々な地域に旅行していました。その楽しかった思い出は今でも鮮明に残っていて、長期休暇に鉄道旅行をするという鉄研の顧問に任命されたときは驚きと同時に喜びも感じました。鉄道について門外漢で、初歩的な質問ばかりする私にも、部員たちは路線や電車の種類、模型の作り方など様々なことを親切に教えてくれます。

鉄研顧問として活動に携わる中でまず感じるのは、模型やＢＶＥ制作などのものづくりの素晴らしさです。私は競技かるたという勝負の世界に身を置き、全国の頂点を目指してひたすら戦うという青春時代を過ごしたので、鉄研でも鉄道模型コンテストの受賞や、高校生鉄道クイズ大会の優勝など、わかりやすい結果につい着目してしまうこともありました。しかし模型やＢＶＥの制作に熱中し、自分の作った模型について来場者に丁寧に説明する部員たちや、オープンキャンパスで鉄研を訪れて目を輝かせてＢＶＥの運転を行う小さな子どもたちを見ていると、彼らは鉄研の活動によって、賞以上に大切なものを得ているのだということがわかります。現代はどんなものでも、お金を払えば上質な既成品が手に入りますが、仲間と協力して一から何かを作り上げることの喜びは何にも代えがたいものだと思います。部員同士でぶつかり合うこともありますが、部活動を通して成長する彼らの姿を今後も見守っていきたいと思っています。

また、鉄道好きの彼らと共に過ごす中で「電車は単なる移動手段ではない」ということも強く感じるようになりました。電車に乗る体験そのものが目的になったり、思い出として心に刻まれるということを、私はこれまで全く意識していませんでした。しかし、鉄研顧問になったおかげで、先日の鉄研夏旅行や上毛電鉄貸切を通じて、電車に乗ることが滅多になかった幼少期、あるいは１８きっぷで旅行していた学生時代のように、「電車そのものを楽しむ」という喜びを思い出すことができました。

ちょっと考えてみただけでも、電車にまつわる思い出はいくらでも思いつきます。多摩都市モノレールが開通した頃、立川に住んでいた祖父母と一緒に生まれて初めてモノレールに乗り、後ろに流れていく町並みを見下ろして「空を飛んでいる！！」と思ったこと。学校帰りに友人と話が弾んで、山手線で反対方向の電車に乗り遠回りして帰ったこと。年二回の競技かるたの大きな大会のために西船橋方面の東西線で西葛西駅に向かうときはいつも、降りる直前に地下から地上に出てぱっと視界が明るくなり、荒川を渡る電車に揺られながら「絶対に勝つ」と気持ちを引き締めること。社会人になりたてで疲れきっていた真冬のある日、御茶ノ水駅で総武線を降りようとしたら、「今日はとても寒い日になり

ました。どなた様も風邪などひかれませんよう、この先もどうぞお気をつけてお帰り下さい」というアナウンスが流れて、その車掌さんの声が優しくて思わず泣いてしまったこと……。誰にとっても身近なものである電車のエピソードは、その人の人生と密に結びついているのだと改めて感じます。

鉄研顧問として日々の活動に携わり、部員たちと共に旅行や車庫見学などの体験をする中で、自分自身も電車にまつわる思い出を増やしていけたらいいなと思っています。今後ともよろしくお願いします。